

イアン・F・マクニーリー／ライザ・ウルヴァートン著 富永星 訳
『知はいかにして「再発見」されたか
アレクサンドリア図書館からインターネットまで』

(2010年、日経BP)

評者：井出 晃憲*

著者は二人とも、オレゴン大学歴史学部で歴史を教える。ハーバード大学のジュニアフェローでの研究をもとに本書を執筆した。

本書は知そのものの歴史ではない。知識の制度化の過程を古代から現代に至るまで主にヨーロッパを中心に詳細に論じたものである。それゆえ、いわゆる知の巨人と言われる人々ばかりでなく、例えばアレクサンドリア図書館の建設に着手したデメトリウスや、またヴィルヘルム・フォン・フンボルトやヴァネヴァー・ブッシュなど一般には知名度の低い人物にも光が当てられている。本書では、ヨーロッパの知的生活を支配してきた、図書館と修道院と大学と文字の共和国と専門分野（ディシプリン）と実験室（ラボ）の6つの制度を取り上げている。これらを目次に沿って概観してみよう。

「第1章図書館-紀元前三世紀～西暦五世紀」においては、古代ギリシャ時代では話し言葉こそが真実につながるというソクラテスの信念に代表されるように口承文化が中心であり、書物に頼るソフィストは軽蔑されていたものが、次第に知の中心として図書館が位置づけられるようになる過程を詳述する。図書館は、主として口伝えだった学問文化を、文書を中心とする文化に変えて、ギリシャの知的伝統を、持ち運び可能で継承できるものにしたのである。

「第2章修道院-100年～1100年」においては、ローマ帝国崩壊とともにキリスト教がヨーロッ

パを支配すると、図書館は西ローマ帝国では保護されることなく衰退していき、知的資産は図書館から修道院に引き継がれていくという過程が述べられる。修道院は、ヨーロッパにおいて文明が減んだ後に、数百年にわたって、学問を守り続けただけでなく、文書の研究と、キリスト教的な終末観の影響からきた時間の区切りや測定の問題をつなぐ役割を果たしたのである。

「第3章大学-1100年～1500年」においては、長期にわたって辺境にある修道院で知識が伝えられてきたが、11～12世紀に至って人口の増加とともに都市が発達し人々が集住するとともに、知識も都市に集まり、その知識を伝達し討論する場として大学が発達する過程が述べられる。当初の大学は、現代のような施設を持たず教師と学生の人的ネットワークとして機能した。ヨーロッパでは、中世の復興によって社会に流動性が生まれ、新しい町ができて、キリスト教とは異なる世界との接触が増えた。こうした空間的広がりによって、改めて知を組織化する必要がでてきたのである。

「第4章文字の共和国-1500年～1800年」とは、手書きの郵便書簡からはじまり、やがて印刷された書籍や雑誌によって縫い合わされることとなった学問の国際共同体のことを筆者は指す。この言葉の起源はローマの雄弁家キケロにまで遡ることができるという。宗教戦争などにより学術文化が危機に瀕するなか、回覧され書き込

* 文教大学湘南総合研究所客員研究員

みが加えられていく手紙のやりとりによるネットワークは、それまでとは違う知識人、過去の制度から独立し、新たな発見を受容する、ヨーロッパの知識人を作り出していったのである。

「第5章専門分野-1700年～1900年」においては、啓蒙運動によって、大規模な知の市場がはじめて誕生するとともに、今日専門分野（ディシプリン）と呼ばれている知的な労働の専門化がはじまった過程を論じる。これはプロシアにおいて顕著であった。新教の福音派と人文主義者と共にフンボルトの功績により、初の国による大がかりな公教育の制度が作られたのである。そして近代的な大学が生まれ、多くの専門分野が成立する。専門分野における教育の方法はセミナーであった。それと同時に、大学出の専門家の新たな市場が形成された。

「第6章実験室-1770年～1970年」では、実験室が、客観的な事実の範囲を物理的に限定し、そしてその方法をより広く大衆へ、私的な空間へと拡張することにより、科学の専門家たちの領域を広げた過程を論じている。現在、アメリカだけでなくこの地球上において、知の制度として残っているのは、「実験室（ラボ）」と専門分野の二つだけだと筆者は述べる。

「結論-そしてインターネットへ」では、これ

まで概観してきたように、知のそれぞれの制度が、多種多様な古い知の実践を省いたり再定義したりして、新たな全方位型の原理に服従させ、前の制度に取って代わっていったことが述べられ、インターネットは、「デモクラシーや商業の命令に従う普遍的な図書館」という古代の夢が蘇り、大衆が、象牙の塔の専門分野の外側で情報を、そしてひょっとしたら知を、共有できるようになったのだと筆者は論じている。

本書は古代から現代に至る知の制度のありようをかなり大雑把に分類して論を進めている。単純化すぎるきらいもあるが、全体を俯瞰するには致し方ないのかもしれない。また、ヨーロッパが中心ではあるが、必要に応じて中国・インド・イスラムの事例をひくなどして奥深さを与えている。さらに、女性の視点に立って、知の制度に貢献した少なからぬ女性について言及している点には好感が持てる。

インターネットは今まさに発展しつつある知の制度であるが、本書で述べられているとおり、知の制度は時代とともに移り変わっている。インターネットという知の制度もいずれは他の何かに置き換わるのかもしれない。そうしたことを考える上でも、本書のように知の制度の歴史を振り返ることは意味のないことではなからう。